

気になる子どもや配慮すべき子どもへの手立てと配慮

～LD, ADHD, 自閉症スペクトラム障害に対する知識と

学校・学級にいるすべての子どもたちへの贈り物～



LD 配慮と手立て

LD 児の特性は人それぞれ違います。まずは知能検査や的確な能力診断を受け、その上で個々の特性に合わせた学習プログラムを組むことが必要となります。例えば、書字障害を伴う子どもに「書けば書くほど覚えて上手に書くことができる」「やればやるほど出来るようになる」といった旧来のルールは、非常に酷なものになってしまいます。少量を毎日コツコツ続ける方が効果的です。また、一般的な教科学習だけでなく、その背景にある能力を底上げすることも必要となると思われます。

「聞く」力に困難をもつ子どもへの手立て

<話が上手に聞けない子とは...>

- 聞き間違ふことが多い。
- 聞きもらしがある
- 聞いたことをすぐに忘れてしまう
- 個別の場での話しは聞き取れるが、集団場面では難しい
- 聞き取りの指示の理解が難しい
- 単語は理解できているが、文章としての意味は理解できない

<背景として考えられること>

○ 耳からの情報の入力に課題がある

- 注意を話し手に向けることが出来ているか
- 文章の聞き取りに間違いはないか

○ 情報の処理に課題がある

- 耳からの情報を記憶しておくことが難しい

<支援へのヒント>

○ 情報の入力に課題のある場合

- 顔を見たり、肩に手をおいたりして、注意を引きつける工夫をする
- 耳からの情報だけでなく、絵、カード、板書など視覚面からの情報をプラスする

○ 情報の処理に課題がある場合

- 聞いた内容を記憶したり理解したりするために、内容を整理する(復唱したりメモを取ったりする、など)

「読む」力に困難をもつ子どもへの手立て

<文章を読むことが苦手な子とは...>

- とばし読みをしてしまう。(文中の語句を抜かしたり、行をとばしたりする)
- 文末などを違う言葉に置き換えて読んでしまう。(「～でした。」を「～でしょう。」と読んでしまうなど)
- 文章の内容を正しく読み取ることができない。

<背景として考えられること>

○ 情報の入力に課題がある

- 読んでいるところを目で追えない。
- 句読点を意識して、ことばを把握することに弱さがある。

○ 情報の処理に課題がある

- 視覚でとらえた文字と意味との理解に問題がある。
- 文章の関係がわからない。
- 構造化、概念化に弱さがある。

<支援へのヒント>

○ 情報の入力→目で追いやさくすること

- 指で押さえながら、読んだり、文節ごとにアンダーラインやスラッシュなどの区切りを引いてみる。
- 1行だけ見えるページカバーを利用し、読む部分のみを目立つようにする。

○ 情報の処理

- 教師が分かち書きを意識して範読する。
- フラッシュカードでキーワードを提示する。
- 聞いたことや見たことを使って語句や内容を理解しやすくする。

「書く」かに困難をもつ子どもへの手立て

<文字を書くことが苦手な子とは...>

- 板書などの写し書きができない。
- 読みにくい字を書く。
- マス目からはみ出してしまう。
- 鏡文字を書く。
- 特殊音節(拗音、撥音など)の表記を間違える。
- 独特の筆順で書いてしまう。
- 当て字など、間違えた字を書いてしまう。

<背景として考えられること>

○ 位置関係をつかむことに弱さをもっている

- 文字の形がとらえられない。
- 視写する部分がどこかわからない。

○ 細部への不注意

- 漢字の細部を間違える。

他に、

- 聞いた言葉を文字に置き換えられない。
- 筆記用具の持ち方が適切でない。

などといった課題が見られることがある。

<支援へのヒント>

- 文章や文字を薄く書いたものをなぞる練習をする。
- マス目を大きくする。
- 写すところを目立つようにする。
- 文字の書き始めや筆順などに番号やマークをつける。
- 漢字をへんやつくりに分けて、漢字のつくりを意識させる。
- ひらがなが書けない場合、漢字から指導を始めることも試してみる。
- 書く文章を声に出しながら書かせる。

「計算する」かに困難をもつ子どもへの手立て

<算数が苦手な子とは...>

- 文章題の意味を理解できない。
- 数量や単位の理解が難しく、数量関係がわからない。
- 簡単な計算や暗算が難しく、時間がかかる。
- 筆算すると、位取りがずれる。
- 図形を描くことが難しい。
- 三角定規などの用具がうまく使えない。

<背景として考えられること>

- 形などの細かい部分の違いがわからない。
- 計算のルールがわからない。

<支援へのヒント>

- 具体物、半具体物を利用して、子どもがイメージしやすいように手助けする。
- 位取りを色別に明示するなど、わかりやすくしたマス目に書かせる。
- 文章題の内容を図示し「ことばの式」で表す。
- 1枚のプリントの問題数を少なくする。
- 用具の使い方や手順を、その子がわかりやすい方法で提示する。

「推論する」力に困難をもつ子どもへの手立て

<自分の考えをまとめることが苦手な子とは...>

- 決まったパターンの文章しか書けない、話せない。
- 目的に沿って計画したり、必要に応じて修正することが難しい。
- はやとちりや飛躍した考えをする。
- 尋ねられた内容に適切な受け答えができない。
- 順序立てて話したり、書いたりすることができない。

<背景として考えられること>

- 何を書いてよいかわからない(何を求められているのかがわからない)。
- 因果関係を理解することが難しい。
- 相手の立場に立って考えることが難しい。

<支援へのヒント>

- ひな形となる項目(初めに、次に、最後に)を提示する。
- 文字や絵で思い出す手がかり(時間、場所、場面、人など)を示す。
- 思い出した項目をカードに作り、並び替える。
- 本人が話し終わるまで待ち、その内容を確認する。

配慮

できたことをほめる

「他者の気持ちが理解できない」ということは、その場でどのような言動が望ましいのかわからないということにも繋がるといわれています。数々の失敗体験の積み重ねの中、自尊心の低下や自信喪失といった状態を引き起こすことで、無気力やうつ状態など二次的障害にもなり兼ねません。出来ないことをけなしたり怒ったりするのではなく、出来ることを「褒める」ことで自信になり、また成功体験を増やしてあげることが配慮の重要な点になります。

「良いこと」と「悪いこと」との違いを明確に

他者の表情を見て心情理解することが苦手なため、口頭で「してもいいよ」「いけません」などとどれだけ説明しても、表情が曖昧であればその真意は伝わりません。伝わりやすい方法はさまざまですが、それでも「良いこと」「悪いこと」がわかりやすいように多少表情を大げさに変える方がよいです。

見通しを持たせる「構造化」

想像力の欠如や認知理解の未熟さという特徴からもわかるように、見通しが持てない、あるいは時間の概念に弱いPDD児も多いと言われています。その日その場で予定が変わってしまうことで大きな不安を抱え、混乱してしまいます。また、耳から聞いた指示よりも、図や絵で示した方がわかりやすいという特性も見られます。目から得る情報が乱雑では意味がありませんが、図や絵での提示、統制された環境の中で指示が理解できるといった場面もたくさん見られます。しなければならないこと、してほしいことをわかりやすく「構造化」していくことも有効です。

三項関係を見直し「共感」してあげる

PDD児は社会性の問題やコミュニケーションすることにも困難さを抱えています。これは突然起こるものではなく、乳児期の頃にも兆候が見られます。あやしても視線が合わない、呼びかけても反応しない、言葉が出てこないなどといった、育てる側にとって悲しい場面も多々見られるのではないのでしょうか。

自分と対象(人・物)との二項関係は成立しているものの、コミュニケーションの基本とも言える、自分と他者と対象との「三項関係」が築けているか、見直すことはとても重要です。他者とのアイコンタクトから始まり、他者が目を向けた方へ追随し、再び視線を合わす、といった一連の動作の中で言葉を交わすことは日常生活の中で何気なく繰り返されています。物を見て、相手が何を感じているのかを言葉にして返すことの中には、「共感」しているというメッセージも含まれています。コミュニケーションを促す上で、この「三項関係」と「共感」は重要な役割を担っています。

「対人関係」に困難をもつ子どもへの手立て

<友達づきあいの苦手な子とは...>

- 色々なことを話すが、その時の状況や相手の感情・立場が理解できない。
- 友達と仲良くしたいという気持ちはあるが、友達関係をうまく築けずにいる。
- 友達のそばにはいるが一人で遊んでいる。

- 仲の良い友達がない。他の子どもたちからいじめられることがある。

<背景として考えられること>

- 対人関係(情緒面、共感的理解)の弱さがある。
- 相手の意図を理解できなかったり、相手の表情から感情を読みとりにかかったりするため、相手と交わる楽しさが得にくいことが多い。

<支援へのヒント>

○友達との関係を広げる。

- 遊びに入れるように担任から働きかけていく。(追いかけてっこなど、ルールのやさしい遊びから始める)
- グループのメンバー構成に配慮する。
- 本人の得意な遊びを取り上げる。
- 遊びを振り返り、楽しかったこと困ったことを整理する。

○トラブルへの対処

- わからないときは、相手に尋ね直すことを教える。
- 困ったときは、先生を呼びに来ることを教えておく。
- トラブルが起こったとき、振り返ってどうすればよかったのか、一緒に考える。
- 子どもの言いたいことや気持ちをことばで表してあげる。
- 相手の振る舞いや顔の表情(目や口元)などから、相手の気持ちに気づくことも教える。

「コミュニケーション」に困難をもつ子どもへの手立て

<コミュニケーションに偏りのある子とは...>

- 嫌みや冗談を言われても何のことなのかわからず、言葉通り・字義通りに受け止めてしまう。
- その場で言うてはいけないことを汲みとることができずに、思ったことを言うてしまう。
- 会話の仕方が形式的で、抑揚なく話したり、間合いがとれなかったりする。
- 独特な声で話すことがある。(一本調子、甲高いなど)
- 話が一方的で、相手とうまく会話を進めることが難しい。
- 球技やゲームをするとき、仲間と協力することに考えが及ばない。
- 会話の時に身振りやジェスチャーをうまく使えない。
- 聞かれている意味が理解できずに、何回も聞き返したり、たくさんのことを伝えられても聞き取れない場合もある。

<背景として考えられること>

- 話し言葉に大きな遅れはないものの、相手との話からその意味や意図することに共感できず、会話がうまく進まない。
- 相手の立場に立って状況が捉えられない。

<支援へのヒント>

○共感性への支援

- その子の受けた色々な感情体験を言葉にして伝えることから始める。

○理解への支援

- 「もうちょっとがんばろう」よりも「あと〇問しよう。〇〇までしよう」など具体的な目標・内容で伝える。
- 話し言葉だけでなく、文字やイラストを併用して伝える。
- 順序立てて、簡単明瞭に話すように促す。
- 禁止の言い方でなく、肯定的な言い方で伝える。（「廊下を走ってはいけない」ではなく「廊下を歩きます」など）

○伝達・表現への支援

- 会話のルールを教えて、練習する。（相手が話している間は、相手に話しかけてはいけないなど）

「こだわり」が気になる子どもへの手立て

<特定のものにこだわる子とは...>

- 限定された興味だけに熱中したり、また特定のものに強い関心や不安を持っている。
- 非常に得意なことがある一方で、極端に苦手なことがある。
- 自分なりの独特な日課や手順があり、変更や変化を嫌がる。
- 特定の分野の知識を蓄えているが、丸暗記であり、意味をしっかりと理解していない。
- 空想の世界(ファンタジー)で遊ぶことがあり、現実との切り替えが難しい場合がある。

<背景として考えられること>

- 相手や周囲との間でおこるさまざまなことに想像力を働かせることができない。
- 相手に合わせて柔軟に思考したり行動したりすることがうまくできなかったり、同じ行為や思考を繰り返し、特定のものへのこだわりがみれたりしやすい。

<支援へのヒント>

- その子の得意なことを生かしたり発表する機会を設けたりして、周りの子のその子への評価を高め、その子の自尊心を育てる工夫をする。
- 普段から活動内容を日課表などで予告し、見通しを持ちやすくしておく。
- 急な変更はできるだけ避け、やむを得ず変更する場合は、言葉だけでなく、日課表の書き換えなど具体的に示し、必要に応じて内容の解説をする。
- 空想の世界は否定せず、好きな作業に取りかかるなどの方法で、気持ちの切り替えができるきっかけをつくる。
- 空想の世界に入るときは、現実場面に興味関心が持てないときが多いことから、現実場面での活動内容について吟味する。

- こだわりを「やめさせる」ことに「こだわりすぎない」ことも大切である。

その他にも...

<その他の気になる行動>

- 独特の表情や姿勢をしていることがある。
- 動作やジェスチャーが不器用で、ぎこちないことがある。
- チック症状など、無意識に顔や体を動かしたり、声を発したりすることがある。
- 感覚(聴覚・視覚・味覚・触覚など)が過敏であったり、逆に鈍感であったりする。
- ストレスが強くなると、ひとりごとなど場にそぐわない行動をすることがある。(かつて経験した嫌な体験が突然思い起こされる「フラッシュバック」により、不安や不機嫌になったり、感情が不安定になってパニックになったりする)

<背景として考えられること>

- 感覚刺激をうまく処理できない(周囲の物音や見えるものなどに対して、騒がしく感じたりする。大勢の人の中にいることを苦痛に思いやすい)

<支援へのヒント>

- 感覚や刺激について好きなものや嫌いなものの情報を、事前に集めておく。
- 不適切な行動の背景は、感覚過敏やフラッシュバックなどが関与していないか探る。(不適応行動は、周囲の不適切な対応への反応の場合もある)

○感覚過敏に対して

- 苦手な感覚刺激への対処を教えたり、排除したりする。(ひとりになれる空間、静かな場所、お気に入りのものなどを準備するなど)
- 本人の好きな活動に誘う。

○フラッシュバックに対して

- 興奮したり、不安が強いときには、場面や話題を変えたり、安心できるものや活動を提供したりする。

○不適応な行動に対して

- あいまいな言葉かけや過度の関わりをやめる。
- 子どものペースに合わせる。
- 感覚過敏に伴う食事、歯磨き、手洗い、着替えなどにおける不適応行動は、子どもの様子に合わせて徐々に和らげていく。

「落ち着きがない」「結果を考えずに思いつままに行動してしまう」「集中が持続しない」などといった行動上の問題はとも目に付きやすく、幼児期から深刻な問題として取り上げられます。しかし、問題行動自体をなくすことに目がむけられがちなのが現状です。これらの問題行動の背景に、発達上の問題や学習面の問題を抱えており、時にLDを合併している場合も少なくありません。また、問題行動を引き金として怒られてばかりの経験を重ねると、自信をなくしたり自尊心を低下させることにも繋がります。「問題行動」よりも「なぜその行動が起こるのか」を念頭に置きながら、子どもに対応していくことが望まれます。

「不注意」な言動がみられる子どもへの手立て

<気が散りやすい子とは...>

- ケアレスミスをする。
- 課題や遊びなどで、注意を集中し続けることが難しい。
- 面と向かって話しかけられているのに、聞いていないような態度に見える。
- 気持ちを集中させて努力し続けなければならない課題を避ける。
- 気が散りやすい。
- 指示に従えず、最後までやり遂げられない。
- 課題を順序立てて行うことが難しい。
- 学習課題や活動に必要な物をなくしてしまう
- 日々の活動において忘れやすい。

<背景として考えられること>

○ 情報の入力や処理に課題がある

- 聞いて理解する力(聴覚理解力)が弱い。
- 見たり聞いたりしたことの内容から必要なことに注意を向けることができるが、その時間は短い。
- 総合的に判断することが困難。

<支援へのヒント>

○ 言葉の理解を促す

- 「お話しします」などと言って、注意を促す。
- 抽象的な言葉は避け、行動化しやすい言葉で指示をする。
- 注意を持続し、課題に取り組み続けられるように教師が声かけをする。

○ 視覚的にはたらきかける

- 注目しやすいように、課題にマークをつける。

- 始めに作業手順を図示するなど、全体の見通しが持てるようにする。

他にも、

- その子がやり遂げられるだけの量や内容を考慮して課題を始める。
- 好ましい行動モデルを示す。
- 廊下側や窓側など、刺激を受けやすい場所は避ける

「多動」な言動がみられる子どもへの手立て

<落ち着きのない子とは...>

- 手足をそわそわ動かしたり、もじもじしたりする。
- 授業中などに突然、不用意に離席する。
- 静かにじっとしていなければならないときに、過度にしゃべったり、動いたり、走り回ったりする。
- 遊びなどにおとなしく参加することが難しい。

<背景として考えられること>

中枢神経の行動を抑制する機能がうまく働いていないと考えられています。

<支援へのヒント>

○ 言葉の理解を促す

- 指示は具体的な言葉で、短く、はっきりと言う。
- 課題を明確に伝え、見通しを持たせる。

○ 視覚的にはたらきかける

- 「5分間黙っている」などと具体的な目標を決め、タイマーなどを利用して自ら課題に取り組ませる。
- 本人が活動する場所や位置を理解しやすいよう、目印になるものを用意する。

他にも、

- 課題が一区切りしたら、早めに休憩したり気分を変えたりする(のびをする、先生の手伝いをする、簡単な体操をするなど)
- 一息入れるときに、あらかじめ先生と決めた活動をする(トイレに行く、本棚の本を読むなど)
- 落ち着きがなくなってきたら、あらかじめ約束しておいた場所や方法 で一定の時間過ごすなど、気分を落ち着けるようにする。

「衝動性」のある言動がみられる子どもへの手立て

<衝動的な言動がめだつ子とは...>

- 質問が終わらないうちに出し抜けに答えてしまう。
- 他の人がしていることをさえぎったり、じゃましたりする。
- 順番が待てない。

<背景として考えられること>

中枢神経系の問題が基礎にあって起こっており、自分勝手やわがままだからという訳ではない。衝動性を抑制するための学習を積み上げて行かねばならない。

<支援へのヒント>

- 発言のルールをその子と決めておく。（「先生が肩に手を置いている間は話さない」「挙手し指名された人だけが発言できる」など）
- その子がルールに従わないときは無視する。ただし、ルールはその場で常に確認すること。
- 発言カードで発言回数をコントロールする。
- 話したいことがあっても、例えば「1、2 …5」と自分でつぶやくことで、はやる気持ちを抑えるように促す。
- 列に並んで待つための工夫をする。（いすを置く、一定の範囲であれば動いて良いことにする、あと〇人になったら、列に並ぶマークに入るなど「順番」が目に見えるようにする。）
- 行動の改善が見られたら、ほめる。
- 適切な行動がとれなかった場合、どうしたらよかったのか状況を振り返り、適切な方法をヒントを交えながら示す。

《引用・参考文献》

- 「今後の特別支援教育の在り方について(最終報告)」(文部省)平成15年3月
- 「広汎性発達障害の子どもと医療」(市川 宏伸 著)2004年8月
- 「軽度発達障害の臨床 AD/HD、LD、高機能自閉症～レッテル貼りで終わらせない よき成長のための診療子育てからはじめる支援～」(横山浩之 著)2011年6月
- 「ADHD(注意欠陥多動性障害) 治療・援助法の確立を目指して」(上林靖子 齊藤万比古 小林達也 井上とも子 長尾圭造 山田佐登留 大隈紘子 著)2004年2月
- 有限会社理学館 HP 文献引用
- 高知大学医学部附属病院脇口明子医師資料参照